

新しい時代に求められる資質・能力を育てる授業の創造 ～個別最適な学びを実現するICT活用を通して～

1 主題設定の理由

① 現代社会の要請から

これからの時代は、不確実性が高く変化のスピードも速いといわれ、この社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば難しい時代になる可能性が指摘されている。変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにする必要性もまた指摘されている。急激に変化する時代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』では、以下のものが示された。

- ・文章の意味を正確に理解する読解力
- ・教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力
- ・対話や協働を通じて、知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力
- ・地域や地球規模の諸課題について、自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげる力
- ・自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力

つまり、習得した知識・技能を既得の知識や経験と結び付けたり、問題を解決するために情報を収集・選択したりする力や、様々な課題を自分事としてとらえ、見通しをもって粘り強く取り組む力が求められている。このような力を育むために、自分の学びを振り返り、主体的に課題を見出し、自身の解決方法や表現方法を用いて追究する。さらに、追究過程、追究結果を振り返り、さらに新たな課題を見い出そうとする姿を目指す本研究は、社会の要請を鑑みると意義深いと考える。

② 学習指導要領の方向性から

学習指導要領の総則「第3 教育課程の実施と学習評価」の中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に向けて以下のように示された。

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。

特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

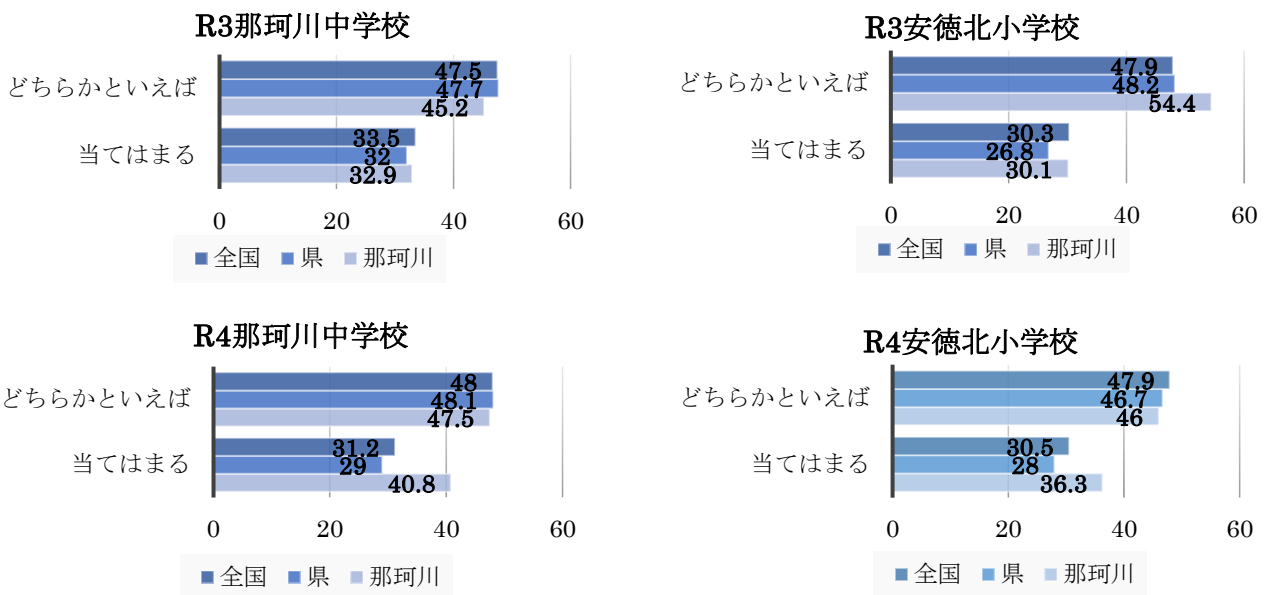
以上のことから、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、児童生徒の実態、興味・関心などに応じて、習得した知識・技能を生かし、働かせることが大切であると考え。本研究において、知識・技能をスタディ・ログと関連付けたり組み合わせたりした概念的理解を図り、生きて働く知識・技能を獲得することができる子供を目指していることから、本研究は意義深いと考える。

③ 児童生徒の実態から

本市ではGIGAスクール構想による1人1台端末環境の整備が進み、ICT端末を活用した学習が日常化している。学習活動の中で児童生徒がICT端末を活用する技術は確実に向上しているが、教師に促され使用する場面が多いのが現状である。また、全国学力・学習状況調査の結果や普段の学習活動の様子等から、児童生徒の傾向として、「課題の解決に向けて、自ら考え、自分から取り組む」「自身の学習を振り返り、次の学習につなげていく」ことに関して、全国平均に比べて低くはないものの、全体的に低水準に収まっており、課題があることがうかがえる。

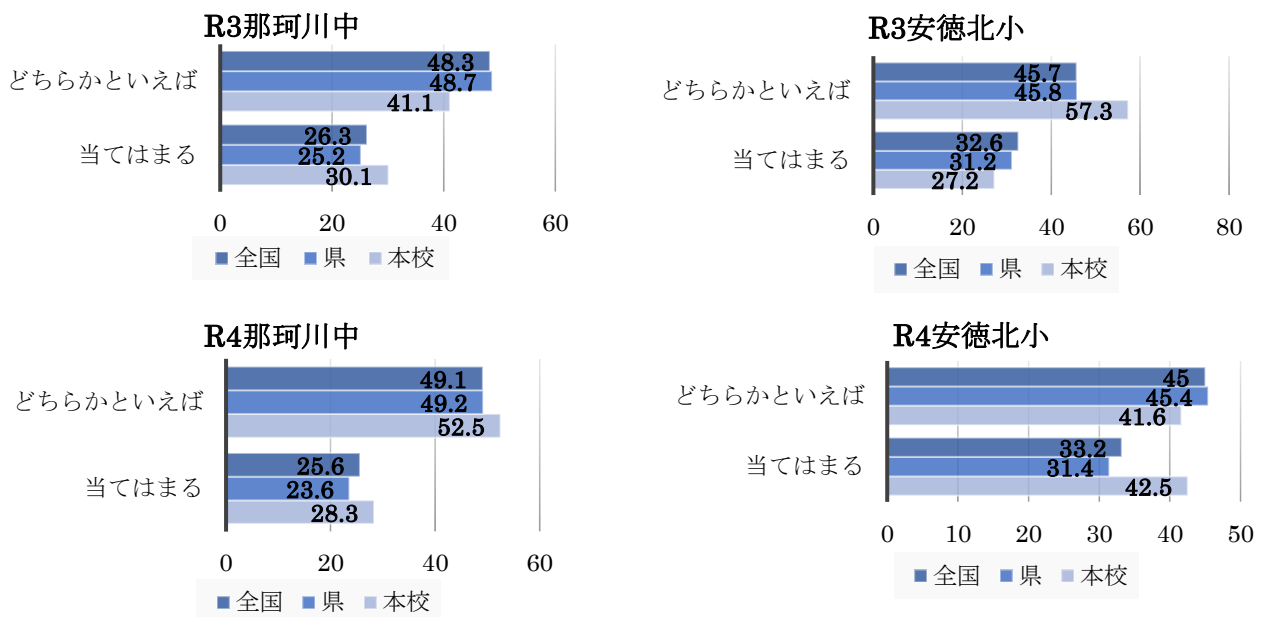
全国学力・学習状況調査（質問紙）より

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」



全国学力・学習状況調査（質問紙）より

「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」



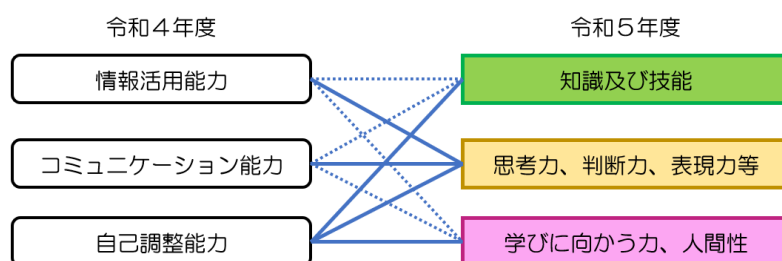
これらの課題の改善には、児童生徒自身が、単元や題材に位置付けられている学習課題の中で学びを「見通し、活動し、振り返る」こと、学習の過程で児童生徒自身が粘り強く課題に取り組み、気づき、自ら学びを調整し、課題を解決していくことが必要であると考えられる。それらを踏まえて、目標の達成に向けて児童生徒が自らの学びを「自己評価（振り返り）」し、蓄積したスタディ・ログを活用し、これからの学びに向けて自らの学びを最適化できるように、解決方法や考え方、表現の仕方を主体的、継続的に調整することを目指す本研究は意義深いと考える。

2 主題の意味

「新しい時代に求められる資質・能力」とは

いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動してよりよく問題を解決する力のことである。そのためには、生涯にわたり学習する基盤が培われるように、基礎的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育み、主体的に学習に取り組む態度を育てることが重要である。

令和3・4年度は学びの基盤となる「情報活用能力」「コミュニケーション能力」「自己調整能力」の育成に重点を置いて研究を進めてきた。3カ年の研究の最終年度となる令和5年度は資質・能力の3つの柱に重点を置いて研究を進める。



【生きて働く知識・技能】

基礎的・基本的な知識・技能を習得するだけでなく、新しい知識が、既得の知識や経験と結び付けられることによって構造化され、転移可能で汎用性のある概念として獲得できる。

学んだことを生かして様々な課題解決を図ったり、生活に役立てたりするために、習得した知識・技能や学び方といった個人のスタディ・ログを簡便に、継続的に蓄積し、いつでも振り返ることができるようにする。

【未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等】

必要な情報を収集・選択して適切な意思決定をしたり、問題をよりよく解決したりすることができる。

伝える相手や状況に応じて方法を工夫しながら他者と考えを共有し、比較・検討・吟味することで付加・修正・強化したり、合意形成したりしていくことが重要である。

【連続・発展的に学びに向かう力、人間性等】

実社会や実生活に関連した課題に対して、学びへの興味と努力し続ける意志を喚起することで、自ら問いを立て、見通しをもって粘り強く学習に取り組むことができる。

一人一人の興味・関心や実態に応じて学ぶ場を適宜提供することで、主体的に学習に取り組む態度を育む。

3 副主題の意味

① 「個別最適な学び」とは

「個別最適な学び」とは、一人一人の理解状況や能力・特性、興味・関心に合わせて、子供がよりよく学ぶことができるように、教師が様々な手立てを行い、学習環境や学習ツール、学習教材を選択・決定しながら学習を進めていくことであり、「指導の個別化」と「学習の個性化」に分類される。

「指導の個別化」とは、一定の目標に向かって、一人一人に応じた指導方法・教材や学習時間などの柔軟な提供・設定を行うことで、児童生徒一人一人が興味・関心、自身の習熟度などに応じて学習を調整することができるようになることである。

「学習の個性化」とは、異なる目標や学習内容に対して、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が自分の興味・関心、課題などに応じて学習を調整することができるようにすることである。

基本的な学習過程は、那珂川市が推進する、学びに向かう姿勢や振り返りを重視した「那珂川スタンダード」に基づく。

② 本研究における「ICT活用」とは

児童生徒が学習内容の確実な定着を図る際や、その理解を深め広げる学習を充実させる際に、児童生徒がICTを使って情報を選択・決定し、学びを進めることである。そのため、教師は児童生徒がICTを活用できるように環境・方法・教材を提供する。

	児童生徒が行うこと	教師の手立て
指導の個別化	スタディ・ログを根拠に… ・ 追究方法の選択 ・ 表現方法の選択 ・ 習熟度別の問題の選択 ・ 協議する相手の選択 ・ 課題解決のヒントの選択 など	児童生徒の実態に合わせて… ・ 習熟度別の教材の提供 ・ 解決ツールの提供 ・ 解決のヒントの提供 ・ 解決モデルの提供 など
学習の個性化	スタディ・ログを根拠に… ・ 自身の目標の設定 ・ 自身の課題の設定 ・ 自身の追究内容の設定 ・ 追究方法の選択 ・ 表現方法の選択 ・ 活動の場の選択 など	児童生徒の実態に合わせて… ・ 課題追究方法のモデル提示 ・ 追究手順の提示 ・ 追究方法の選択肢の用意 ・ 表現方法の選択肢の用意 ・ 活動の場の設定 ・ 関連する人材、機関との連携 など

② 「個別最適な学びを実現するICT活用」とは

「指導の個別化」や「学習の個性化」の質を高めるために、単元や那珂川スタンダードに基づいた学習指導過程「課題の明確化」「解決の見通し」「自力解決」「話し合い・まとめ」「振り返り」の5つの活動段階において、ICTを活用する場や、個人思考と協働思考を選択・決定する場を児童生徒の

実態に応じて位置付け、効率的、効果的にICTを活用することである。特に、「振り返り」の段階では、目標の達成状況、学び方を自ら評価し、スタディ・ログとして残すことで次の学びに生かせるようにする。スタディ・ログとは、児童生徒が残した学びの蓄積のことである。なお、本研究において全ての教科で共通して活用するスタディ・ログは「自己評価」である。

4 研究目標

新しい時代に求められる資質・能力を育てるために、学びが最適となるように解決方法や考え方、表現の仕方を主体的・継続的に調整することができる児童・生徒の育成を目指す。

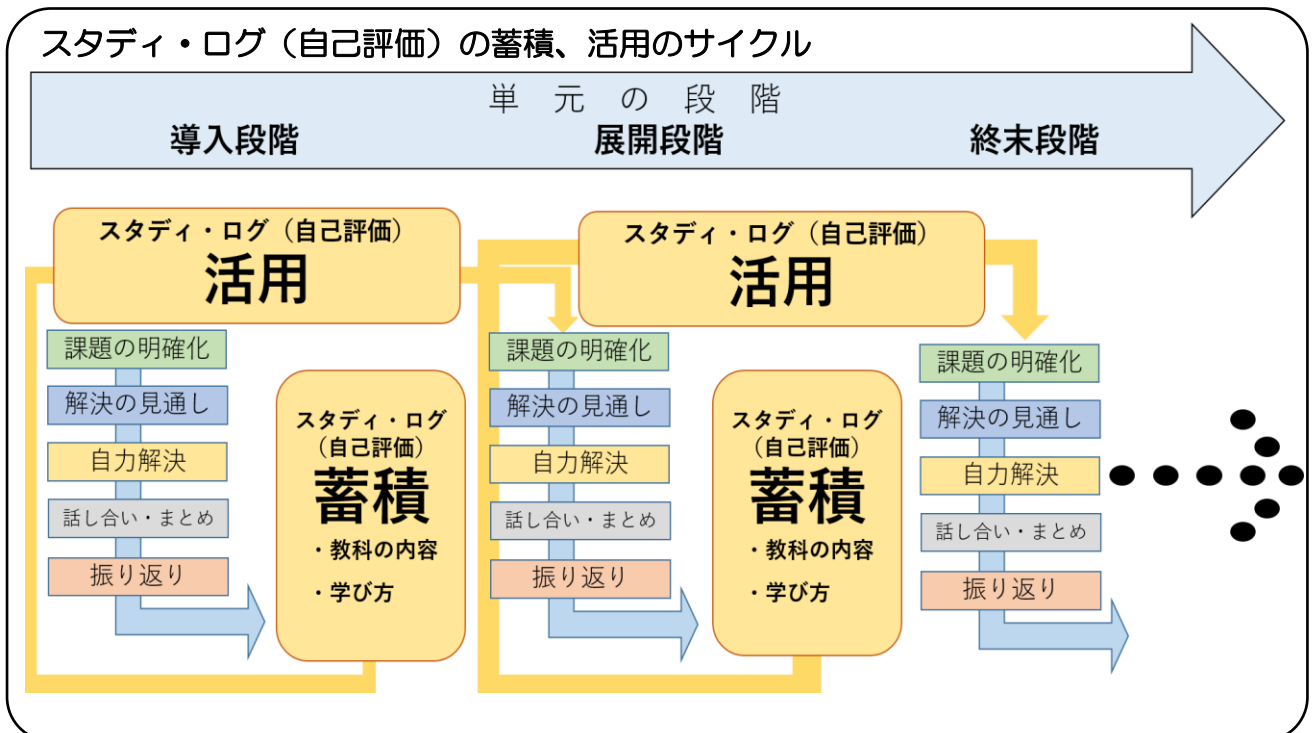
5 研究仮説

新しい時代に求められる資質・能力を育てるために、スタディ・ログの蓄積と活用を土台とした個別最適な学びを実現するICTの活用のあり方を究明することで、児童・生徒が自らの学び方を評価しやすくなり、学びが最適となるように解決方法や考え方、表現の仕方を主体的・継続的に調整することができるであろう。

6 研究の具体的方途

① スタディ・ログの蓄積と活用

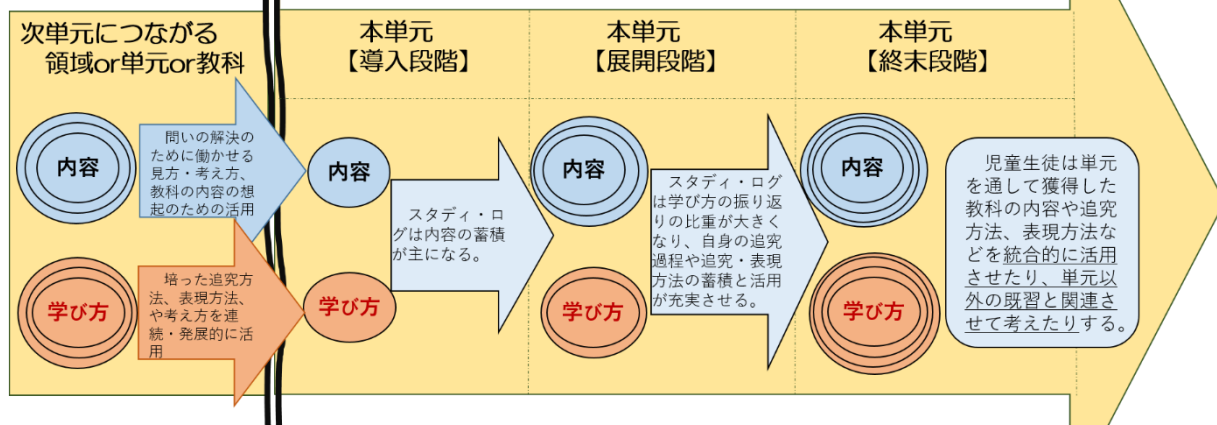
本研究における「振り返り段階」で行う自己評価とは、学習の内容と学び方の確認を児童生徒が行うことである。学習内容の定着度やその要因を児童生徒が蓄積し、活用することで、自身の変容に気づき、「次はこうしたらいいかも」「次も同じようにやってみよう」「〇〇な場合はどうしようかな」と自ら問いを見いだす力を高めることができると思う。本研究において、自己評価はスタディ・ログの一つとして、1単位時間の終末段階に行い、蓄積する。さらに「課題の明確化」の活動の際にスタディ・ログを活用する場を設定することで、蓄積と活用のサイクルを位置付ける。



スタディ・ログの蓄積と活用については、個別最適な学びの指導の個別化と学習の個性化の学習形態によって学習内容と学び方の蓄積具合が異なると考える。以下は指導の個別化と学習の個性化のスタディ・ログの具体例である。

【指導の個別化】におけるスタディ・ログの蓄積と活用

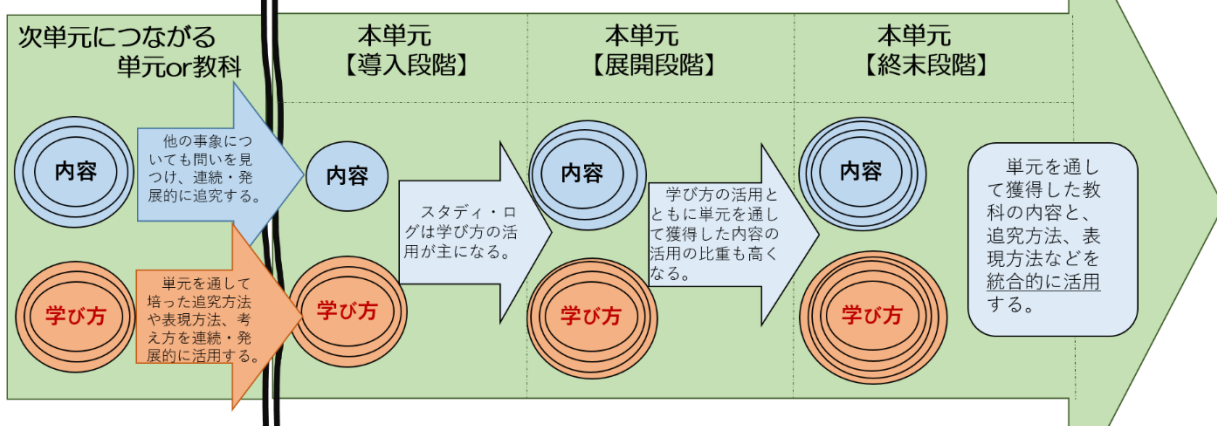
【問題解決的な学習】の場合は以下のような自己評価の蓄積と活用が考えられる。円の重なりはスタディ・ログの蓄積を表している。



単元の導入段階から、展開段階までは主に教科の内容についてのスタディ・ログが蓄積、活用され、追究方法、表現方法、見方・考え方、協働の仕方などの学び方の活用と蓄積は展開段階以降に主に行われる。終末段階では、内容と学び方を統合的に活用し、単元を通した内容と学び方をスタディ・ログとして蓄積する。

【学習の個性化】におけるスタディ・ログの蓄積と活用

社会科や総合的な学習などのような【探求的学習】の場合は以下のような自己評価の蓄積と活用が考えられる。円の重なりはスタディ・ログの蓄積を表している。

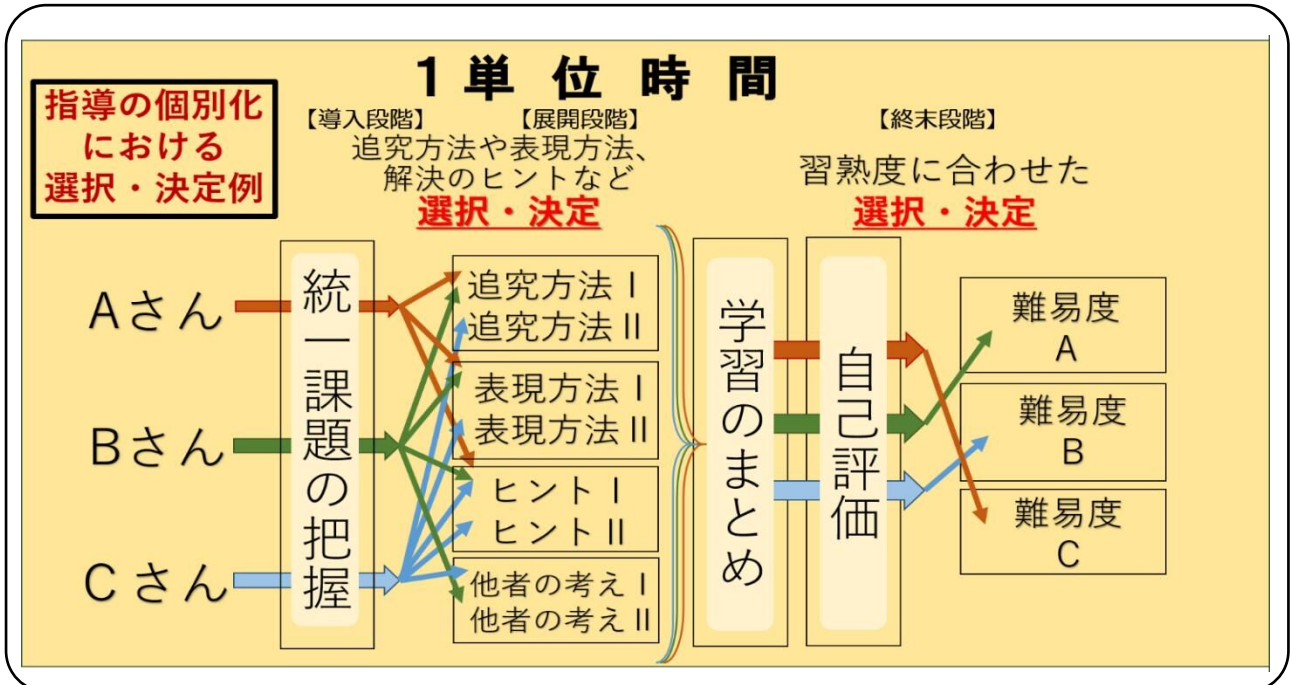


単元の導入段階から、追究方法、表現方法、見方・考え方、協働の仕方などの学び方の活用と蓄積が行われ、単元を通して主に学び方が育むことをねらいとしている。

② 選択・決定の場の設定

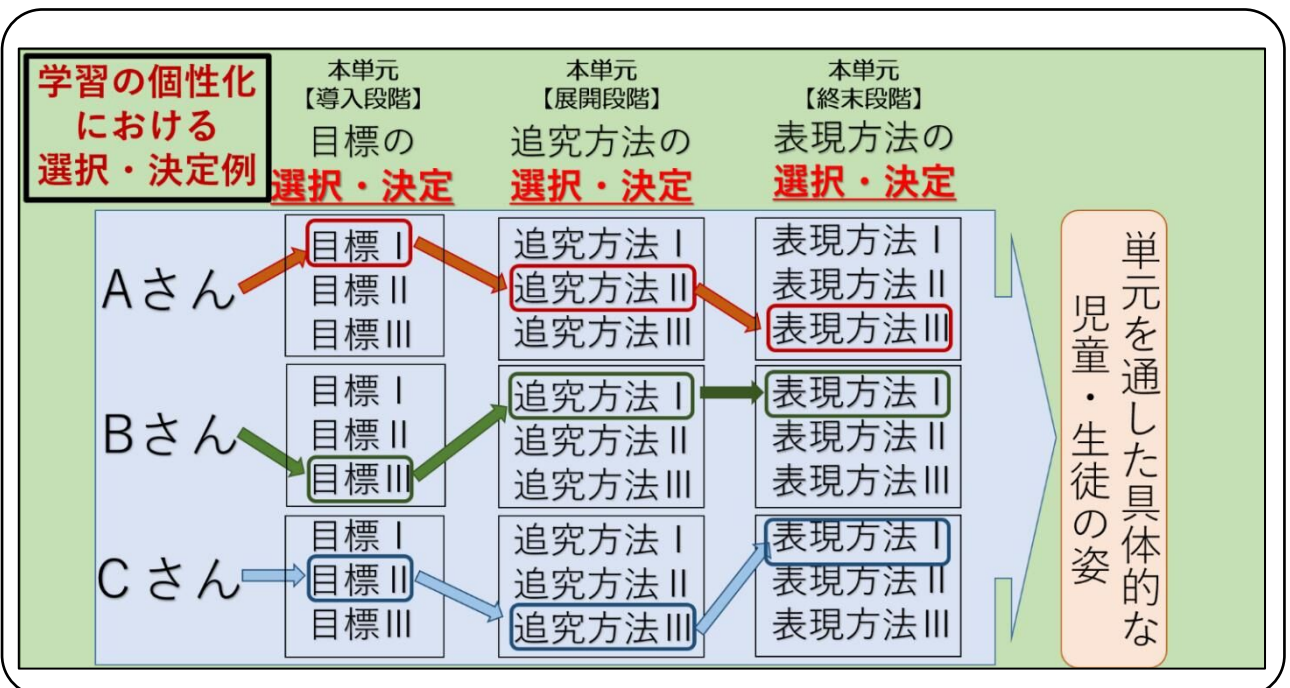
指導の個別化においては主に1単位時間において以下のような選択・決定の場を設定する。

大切なことは児童生徒が課題解決のために自分で解決方法や表現方法などの選択肢を用意したり、場を設定したりすることである。



学習の個性化においては主に単元段階において以下のような選択・決定の場を設定する。

大切なことは児童生徒自身が学習目標を各自で選択・決定できるような単元の選定や工夫、横断・縦断的な取り扱いなどを行うことである。



③ 単元計画の工夫

児童生徒一人一人が興味・関心や自身の習熟度、課題、目標などに応じて学習を調整することができるように、単元を通してICTを活用する段階を精査し、スタディ・ログの蓄積や活用する場を位置付けた計画を行っていく。なお、個別最適な学びを実現するためのICTの活用は単元のすべての時間に行うわけではなく、単元の中で効果が高いと考える段階で行う。また、全単元で行うわけではなく、年間カリキュラムから効果があると思われるいくつかの単元において行う。

8 研究構想図



9 研究の検証方法

本研究は以下の方法で検証をしていくものとする。

【知識及び技能】

- ・特別問題の作成（4月と10月にデータを取る）

【思考力・判断力・表現力等】

- ・学習ノート
- ・児童生徒の様相（映像資料）
- ・スタディ・ログ

【学びに向かう力、人間性等】

- ・自己評価の記述、アンケート（4月と10月）
- ・全国学力学習状況調査の質問紙（3カ年のデータの比較）